

平成 27 年 2 月 24 日

## 平成 26 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

電気通信大学学術情報課

上野 友稔

### 1. 目的

- ・ 英国で進められているナレッジベース（電子リソースのタイトルや URL 等のメタデータを集めたデータベース）の共同構築プロジェクトである KB+（Knowledge Base Plus）について、その現状と課題を調査する。
- ・ KB+が、その参加機関にもたらすメリットと課題について調査する。
- ・ KB+の参加機関が、KB+のデータを図書館サービスにどのように利活用しているかを調査するとともに、その将来展望について意見交換を行う。

### 2. 訪問期間

平成 26 年 9 月 22 日（月）～26 日（金）

### 3. 訪問先および担当者

- ① JISC Collections（JC） / Mr. Liam Earney、Ms. Margaly Bascones
- ② The University of Huddersfield（UH） / Mr. Graham Stone、Ms. Amy Devenney
- ③ King's College London（KCL） / Ms. Kate Price、Ms. Nadia Casagrande

### 4. 視察成果

JC では、KB+のプロジェクト体制、今後の進行および課題について調査を行った。

KB+は、電子リソースのタイトルや URL 等の正確なメタデータを JC が集中的に管理するとともに、KB+のデータを大学図書館コミュニティでシェアするにより、各参加機関が電子リソース情報の管理に当てている業務の省力化を目指している。また、Web-API を用いてディスカバリサービスやリンクリゾルバへ自動的に KB+のデータを提供することで図書館サービスの向上が期待されており、さらに電子ブックや予算情報の取り扱いといったさらなる機能拡張が検討されている。

次に、UH と KCL での調査の目的は次の二点である。第一の目的は KB+が参加機関にもたらすメリットについて、第二の目的は図書館サービスへの利活用についてである。

両大学とも、KB+に参加した最大のメリットを業務の省力化であると回答した。UH では 1 サービスプロバイダに対して 3 つのタイトルリストが存在し、そのどれも正しくないデータの管理に当てていたスタッフのマンパワーが軽減した。また、KCL ではがフリーア

クセスも含め 6 万タイトルにも及ぶジャーナルが利用されており、KB+を利用してからは以前と比べ正確に管理できるようになった。このようにして、KB+が目的とする参加機関の業務の省力化を確認することができた。

さらに、サービスへの利活用という点では、両大学ともディスカバリサービスやリンクリゾルバへデータを提供しており、利用者サービスへの活用を積極的に行っていた。特にディスカバリサービスは日本でも導入事例が増加しているが、図書館サービスの中核となっていくことを再確認できた。